

## 徳島県指定有形文化財(歴史資料)として指定

報告がずいぶん遅れてしまいましたが、昨年3月28日にドイツ館の所蔵する板東俘虜収容所での捕虜製作の印刷物298点が徳島県指定有形文化財(歴史資料)として指定を受けました。印刷物ですから当然のことですが、この中には同一内容物が複数含まれていまして、重複分を除くともっと数は減ります。この指定を受けるために田村前館長の時から行われていた準備作業では、家具や陶器、絵画といった捕虜の制作品もリストにあげられていたのですが、今回は板東俘虜収容所での印刷物に限定されることになりました。これらを作成した収容所内の印刷所については2カ所が知られています。ひとつが「(板東)収容所印刷所」で、謄写版による印刷をまっぱら行い、本格的な製本も行っていました。もうひとつが「石版印刷所」で、ここはその名のとおり石版による印刷物を発行していました。

その詳細をすべて網羅することは、ここではとてもできませんので、おおよそのところを示すことにします。まず当時の捕虜たちの生活や活動、心情などを知る上での第一級の史料である新聞ですが、板東収容所新聞『ディ・バラック』および松山収容所新聞『ラーガーフォア』復刻版の合わせて31点あります。新聞とはいっても数点をのぞき、ほとんどが合本となったり、もともと書籍の体裁で発行されたものです。

書籍は33種66点。ここには板東で出版された書籍の多くが収集されています。その多くは謄写版による印刷物ですが、石版印刷もいくつかあります。その代表例は『鉄条網の中の4年半』および『鉄条網の中の4年半 追録』です。

コンサートプログラムおよび演劇などのプログラムは89種、重複分をあわせて141点になりますが、すべて謄写版印刷によるものです。これらにはLagerdruckerei「収容所印刷所」と記された印刷物もあれば、記載の無いものもありますが、すべて「収容所印刷所」で印刷されたものと見てよいでしょう。印刷は単色、黒インクだけのものもありますが、多色刷りも多く、

とても美しいものです。保存状態が良好で、褪色もあまりないのではないかと推察されるものもたくさんあります。もとより印刷当時の色彩がどのようなものであったのか、知りようがないのではありませんが、種別で見ると、もっとも多いのがコンサートプログラムの64種102点で、次いで演劇の16種23点、その他9種16点となります。これらのプログラムで注目されるのは、デザイン担当者のマークが記載されているものが半数以上あることです。具体的にはF.S.というイニシャルを付したものが7種、図版のようなGとMを重ねたロゴマークのあるものが50種です。後者は前号で紹介したように、グスタフ・メラーという人のロゴマークで、彼は『ディ・バラック』編集者のひとりです。作成したプログラムが全体の半数以上を占めていることから見て、彼が「収容所印刷所」内の印刷担当リーダーであったことはまちがいないことでしょう。一方のF.S.が一体誰を指すのかは、今のところ不明です。このような署名のないプログラムの制作者は、この二人以外なのかどうかよく分かりません。ただしオリジナルの絵がどこかにあって、それをコピーしている場合にはその元絵の作者名が記載されている場合があります。この場合、制作者のオリジナルではないために、あえて署名をしなかったとも考えられます。



これ以外に点数の多いものは絵はがきで29種43点あります。このうち半数が石版印刷というのが、ほかと異なる点です。これらの絵はがきは未使用のものが多く、記念に買い求めていたものが多くあったことが察せられます。そのほかには地図など4点、広告6点、切手2点といったところがあります。

これらについては現在のところ公開できるような目録はないのですが、解説を付した目録を作成しようと準備しているところです。

## ドイツ兵捕虜の遠足

昨年10月1日から20日までの間、特別企画展「ドイツ兵捕虜の遠足」を開催しました。お越しになれなかった人たちのためにも、この機会にその展示の概要をここでまとめておきます。

板東収容所の捕虜たちは、1919年になって所外散歩と終日遠足とを頻繁に行うようになります。散歩といっても山を歩くことが多いので、遠足という方がぴったりです。そこで「ドイツ兵捕虜の遠足」というタイトルにしたわけです。遠足自体は板東に来てしばらくは、ほとんど行われていませんでした。それが大戦の終結が濃厚になった1918年10月になって、収容所から少し離れた大坂峠までの遠足が行われます。この時の遠足は警官の付き添いはあるものの、銃剣を携えた衛兵のいない初めての遠足となりました。これからたびたび収容所外への外出の機会が増えると思われたところが、この直後からスペイン風邪が収容所内で猛威をふるい、とても遠足どころではなくなります。そしてそれが治まって、翌年の1月になりようやく再会されることになったのです。

その遠足ですが、収容所新聞『ディ・バラッケ』に記載されている10月末日までで総計70回以上も行われています。その行き先はさまざまで、遠くは東の小鳴門海峡、西の大山（おおやま）まで歩いています。その距離は、遠いところで往復40kmはあるのではないかと思います。今回、当時（当時のものが欠落しているものは第二次大戦直後）の二万五千分の一の地形図に遠足の経路をいくつか試みに記入して展示したのですが、記録として残された経路だけではおよその道は把握できても、具体的な経由地までは明瞭に示すことができない場合の多いことがよくわかりました。

捕虜たちは遠足の行き先や途中の土地に独特の名前をつけて

います。幸い収容所周辺が含まれる徳島県板野郡の4万分の1の地図を捕虜が製作印刷しており、それにこれらの地名の記載がありますので、およその場所がわかります。その地名には、たとえばWettergott（天気の子＝龍神）とかNixental（水の妖精の谷）やParadiestal（極楽谷）といった美しい名称がありますが、その命名の由来は現地にその手がかりが見つかるものもあれば、今となっては不明なものもあります。「龍神」は今でも弘法大師が雨乞いをしたという伝説のある「をたつ祠」というものがそこにあり、雨乞いに由来する命名であることは確かです。しかし「水の妖精の谷」は今では草木の生い茂る狭い谷で、なぜそう命名されたのかよくわかりません。一方「闘牛士」と名付けられた山があるのですが、これは地元で「三頭山」といい、元収容所付近からもよく見える山で、三つのこぶからなる山頂はなるほど「闘牛士」のかぶる帽子に似ていなくもありません。

遠足に行った先で、また散歩の途中で撮影された写真が残されています。今回は残念ながらドイツ館所蔵のものだけでは足りず、ドイツ-日本研究所所蔵の板東コレクション中の写真をかなり使わせていただきました。今回はこれらの写真の撮影場所を特定する作業を行い、多くのものについて現地を訪れた上でできるだけ同じような場所からの撮影も試みました。そして昔の写真と現在の写真を二つならべて、過去と現在の比較もできるようにしてみました。ここにそのうちの3つをお見せします。

この撮影場所の特定をする作業は、容易に分かるものから、見当をつけて現地を訪れても全く違ってがっかりしたり、偶然にその場所を見つけて感動したり、といろいろでした。しかし何の手がかりもなく、場所の特定ができないものも相当残りました。

この作業をしていて驚いたのは、元捕虜のアルバムの中に板





東あるいはどの俘虜収容所とも全然関係のない写真が紛れ込んでいることでした。具体的には日光の「神橋」や五重塔、信州上高地の奥地の写真などがあり、それが判明するまでかなり手こずりました。なぜこれらの写真が含まれているのか、大きな謎です。捕虜が帰国前にこれらの地を訪れていたという可能性は、まずありません。というのは捕虜の解放後の残留者名簿にアルバムの元所有者の名前は見当たりませんので、すぐに本国に帰還したはずですから。筆者は、日本の名所旧跡の写真が収容所で販売されていたかもしれないと思っています。というのも、元捕虜所有の名所旧跡の絵はがきが数多くあるからで、彼等は絵はがきだけでなく板東以外の場所の写真も購入していたかもしれないのです。事実、陸軍文書によれば板東収容所の酒保（売店）で販売された物品に、最初の数ヶ月だけですが写真も含まれていました。

もうひとつの驚きは、ふんどしや短パン姿の兵士が写る写真の撮影場所が、従来『ディ・バラック』によく登場する「櫛木海岸」と思われていたのが、まったく違う場所であることでした。同じ鳴門市ですが、櫛木から西に10km離れた所にある大

須の海岸やさらに東、香川県の坂元であることが判明したのです。大須の比較写真でお分かりいただけると思いますが、昔の写真の背景にある岸壁が国道を通すために消滅しています。しかし幸い、背景に見える山は昔とほとんど変わっていないので、判断が可能となったのです。『ディ・バラック』にはここで泳いでいたという記録はありませんし、そういう話もこれまでに聞いたことがありません。ところで『ディ・バラック』の中であれほどまで賞揚された「櫛木」の写真は、海岸で撮影されたものが何枚もあるうちで、残念ながらたった1枚しか見つかりませんでした。

今回の企画展では事前に実際の登山路をたどってみることは、季節的にまむしが多くて危険なためできず、ほとんどが自動車で行ける範囲でしか踏査できませんでした。できれば冬枯れの季節にでも実地調査をし、捕虜たちの遠足の足取りを追跡できればと思っていますが、今は通る人もない山越えの道が多いようで、藪に閉ざされているかもしれません。





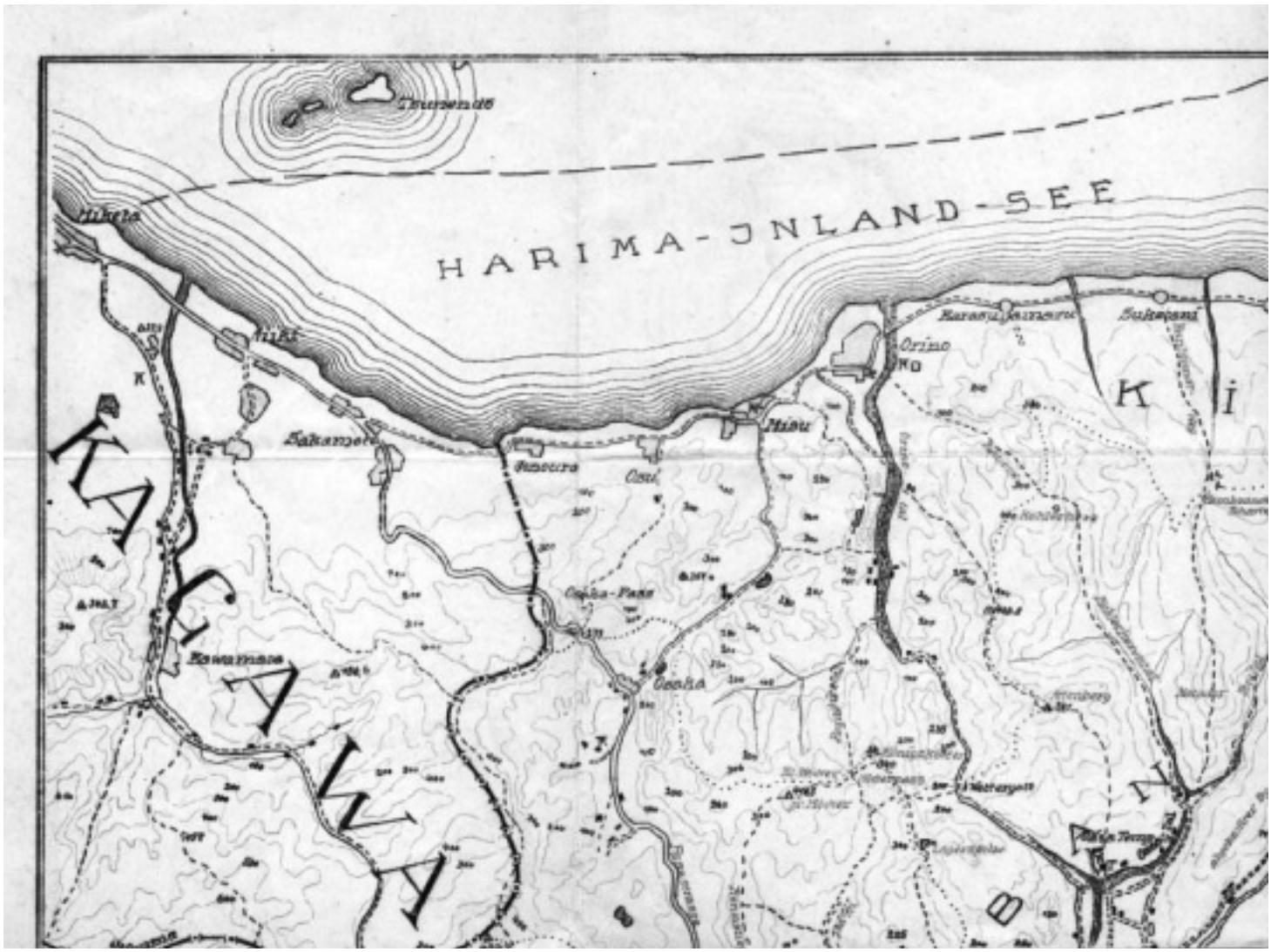
## ドイツ館所蔵資料紹介

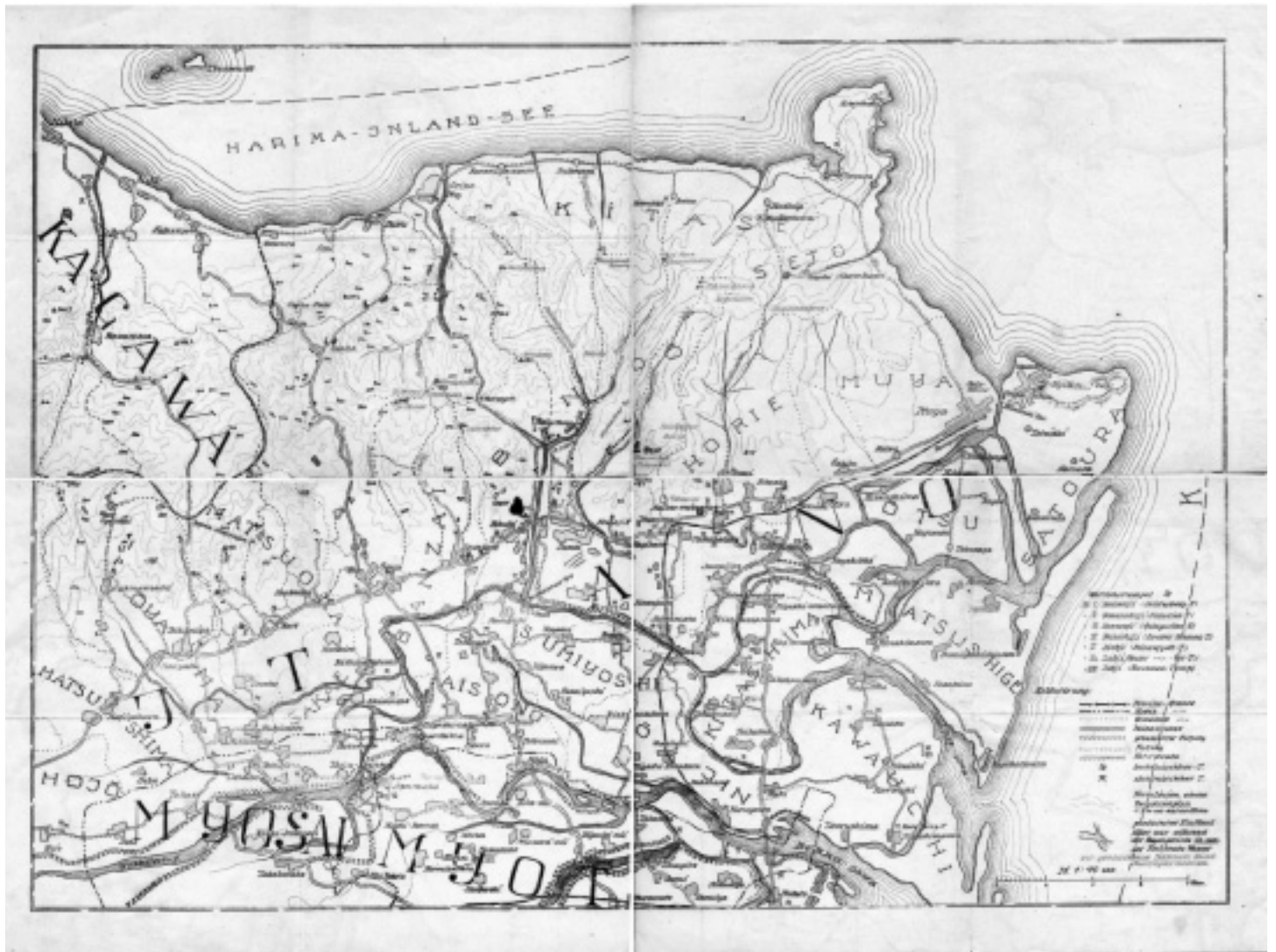
### 板野郡地図

これは10月の特別展示展のための基礎資料のひとつとなったものですが、展示することはありませんでした。ほぼB4の大きさ(25.3cm×35.5cm)の4葉の地図に分割して制作された4色刷りの謄写版印刷です。最初の画像は西北部分の1葉です。その次の画像は4葉を一枚の地図になるように合成したもので、中央付近に黒いしみのように見える部分が収容所です。縮尺は4万分の1とされています。地図の精度はそれほど高くはありませんが、地理的な位置関係や地勢は概略把握できるものです。作成のために使用した元の地図がどのようなものであったかは不明ですが、この地図の右上にあるはずの大毛島や島田島など、現在の鳴門市市街と淡路島との間にある島が欠落しています。これはもともと彼らの入手した地図にも記載がなかったと考えられます。というのは、この付近は淡路島にあった由良要塞に近く、一般向けの詳細な地図は許可されなかったはずだからです。

今日の私たちにとってこの地図が有用な点は、別記事でも書いたとおり、登山路や捕虜独自の地名が記載されていることです。『ディ・バラッケ』には捕虜たちの遠足の行き先とその際の経由地が書かれているのですが、捕虜が独自につけた地名がよく出てきます。『ディ・バラッケ』の記述だけではどこを指すのか不明であったそのような地名が、この地図を見ることにより明確になったり、少なくとも概略の位置はつかめるようになりました。とはいえ、地図自体の精度がそれほど高くないため、それらの場所を2万5千分の1の地形図に正確に書き込むことは容易ではなく、また不可能な場合もありました。それでも、ほぼどのような経路をたどって遠足をしたのかは分かります。

それ以外に目を引いたのは、地名漢字の読み間違いです。日本人にとっても読みづらい地名や読み誤りやすい地名はいくらでもありますから、ドイツ人が間違えても仕方がないかもしれませんが。たとえば、「北灘」をKITASE、「相生」をAiki、「矢三(やそ)」をYamiなどと記しています。恐らく漢字を読める捕虜が間違った読みを教えたのでしょうか。しかし一方では、難読地名の「助任」を正しくSuketoと書いているのです。





## 最近気づいたこと

俘虜収容所は、特に6カ所に統合されてからは、収容所としての体裁も整えられて、捕虜の居住する兵舎もだいたい同じ規格で作られているように見えます。ただし、これはあくまでも写真からの推論ですが。一方外周については、収容所ごとに板塀であったり、鉄条網であったりしました。板塀は外部からの視線を遮断する目的で設置されたのかもしれませんが、内部の人間からすると閉塞感を強く与えるものとなります。たとえば似島（にのしま）収容所の捕虜は、似島が周囲を海に囲まれた島であり、人家から遠いにもかかわらず、周囲を板塀で囲まれて折角の瀬戸内海の景色も見えないと苦情を訴えています。

その点、板東は恵まれていたと言えます。確かに、周囲は鉄条網ですから閉じ込められている感覚が起きるのは当然ですが、少なくとも外部への視界は遮られることはありません。また傾斜地に設置されていたから、収容所内の小高い丘に登れば吉野川平野とその向こうの山脈まで眺めることができます。従来ここは、このように鉄条網だけで囲まれているものと思込んでいました。しかし収容所の建物の様子を調べるために、当

時の写真を拡大して眺めているうちに、それが間違いであることに気づきました。収容所の東側と西側の一部には、鉄条網とさらに板塀（らしきもの）も合わせて設置されていたのです。あまり鮮明に写っているものがなかったので、これまで気づけることはなかったのでしょうか。この区間は洗面兼洗濯場および便所が近くにあって、捕虜の生活がのぞき見られるのを防ぐとともに、鉄条網越しにドイツ人と日本人が接触するのを避けるといった配慮が働いたのかもしれません。

『鉄条網の中の4年半 追録』の中に「哲学者の道」と題する絵がありますが、その道の横に走る鉄条網の背後には板塀らしきものが描かれています。これまでさして気にも留めなかったのですが、なるほどと思った次第です。ちなみに、1919年4月1日現在の状態を記載する捕虜制作の625分の1『板東俘虜収容所要図』は敷地内の小さな法面や地下給水路、屋外の体操器具の位置を示すなどかなり精細なものなのですが、この区間も鉄条網のみの表示になっています。



## 「俘虜」と「捕虜」

特別展をご覧になった方々から、なぜ「捕虜」という表現を使うのかとか、「俘虜」と「捕虜」の違いがわからないという質問がありました。これは、どちらも同じ意味のことばです。

『広辞苑』を見ますと、同じ定義になっています。従来ドイツ館では、収容所が置かれていた当時よく使われていた「俘虜」を使ってきました。しかし今日では「俘虜」ということばを知る人は少なく、一般に「捕虜」と言いますので、これからはできるだけこちらを使うようにしたいと思っています。昨年10月に岡山大学で行われた青島戦ドイツ兵捕虜に関するシンポジウムでも、「板東俘虜収容所」のような固有名詞以外では「捕虜」を使うよう統一したいと主催者からの提案がありました。

ちなみに、当時の各種史料を見ますと、陸軍文書ではほとんど「俘虜」ですが、外務省発信の文書では「俘虜」とともに「捕虜」を使っているものが、特に初期に見かけられます。また新聞や雑誌ではどちらの表現も見られますが、どちらの語を使うかは筆者によるようです。ひょっとすると民間では「捕虜」の方が一般的だったのかもしれませんが。陸軍関係の資料にも戦闘後に捕えたばかりの兵士については「捕虜」と書いているものがあるので、「俘虜」と使い分けをしているようにも見えますが、同じ状況で「俘虜」と書いている文書があり、何とも言えません。

## 昨年に行われた主な行事

- 4月6日(日) ドイツのイースター祭り
- 5月3日(土)～6日(火)  
ワイン祭り
- 6月1日(日) ドイツワインのタベ
- 7月5日(土) セタコンサート
- 8月13日(水)・14日(木)  
ドイツビール・ソーセージ祭り
- 8月24日(日) 第15回 ピースコンサート in 鳴門
- 9月20日(土) 収穫祭(ドイツフェア)
- 10月16日(木)  
アンサンブルドナウ ジョイント コンサート
- 10月26日(日) 第15回ドイチェス・フェスト in なると
- 11月9日(日) ドイツ音楽の花束
- 11月29日(土) シューベルト作曲 歌曲集『冬の旅』

12月7日(日)

第8回ドイツ村友の会 クリスマスの集い

12月14日(日) 第3回ドイツ館のクリスマス会

12月23日(火)

コーラス9 第4回演奏会 X'mas concert

## 昨年に行われた特別企画展

4月5日(土)～15日(火)

イースターペインティング作品展

4月17日(木)～27日(日)

ドイツ木版画展

5月27日(火)～6月9日(月)

「第九」コンサート写真展

7月1日(火)～15日(火) BANDOロケ村 絵の展覧会

8月1日(金)～31日(日) お花の工芸展

9月3日(水)～15日(月)

松江豊寿所長のふるさと 会津若松観光展

10月1日(水)～20日(月) 「捕虜の遠足」

10月24日(金)～11月9日(日)

ASAトライアングル小学校絵画展

11月26日(水)～12月9日(火)

鳴門日独友好協会創立30周年記念写真展

12月13日(土)～1月18日(日) 奥山実秋絵画展



### 👁️ 編集後記

今号は本来10月ごろ出す予定だったのですが、大幅に遅れてしまいました。それは何よりも筆者の怠慢のせいで、申し訳なく思っております。今は冬のまっただ中で、最近暖冬気味だと言われながら、ドイツ館の北側では氷が張って昼頃まで溶けなかった日もありました。時節柄、風邪など召しませぬよう、ご自愛ください。(川上記)